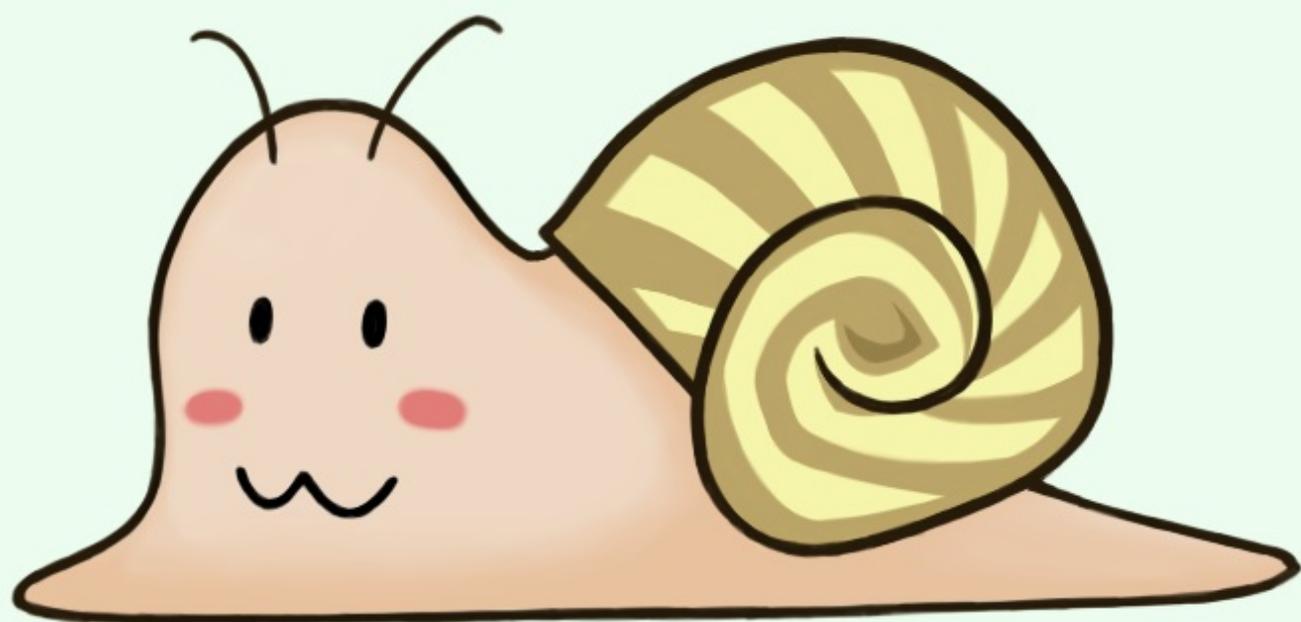


スマイル君の 質素な日常



あけの まだし

僕の名前はスマイル。この世で一番進んでいるカタツムリさ。どこか遠い場所からやって来たような気もするけど、良く覚えていないんだ。今は日本に住んでるよ。

「おーい、スマイル」

僕を飼育しているつもりの同居人、マイケル・クラムヘッドがやってきた。

「どうしたの、マイケル」

「ちょっと出かけてくる」

「え、今日は僕に付き合ってくれる約束だよ」

「床屋に行くんだよ。もう、3ヶ月になるからな」

「この前は、まだ3ヶ月だって言ったくせに」

「ほら、前回書いた作品が思ったより売れたじゃないか」

「ああ、そうだったね」

僕らはネット上のショップで小説とかを販売して細々と暮らしているんだ。

「おかげで床屋に行く余裕ができたわけさ」

「どこの床屋へ行くの？」

「ほら、隣町の」

「あそこは遠いじゃない。帰ってきたらお昼になっちゃうよ」

「あそこが一番安いんだ。それに店員は女性ばかりだしな」

「確か、おばさんだけじゃなかったっけ？」

「それがさ、さっき牧場のおじさんに聞いたんだけどな、若い子が2人も入ったんだってさ」

全く、そんな理由で床屋に行く気になるなんて……。しかし困ったな、マイケルが居ないと何かと不便なんだよ。

「僕だけじゃパソコンの操作が面倒なんだよ」

「出来ない訳じゃないだろ。こないだマウスも作ってやったし」

僕専用の小型マウスの事だ。マイケルは何故か工作は上手いんだ。

「仕方ないなあ、僕一人でやってるからパソコンの電源入れてってよ」

「わかった、わかった。そうだ、昼は何が食いたい？ついでに買ってくるぞ」

「えーと、ピザでいいよ」

どうせ僕が食べる量なんてたかが知れてる。あんまり高いものを望んだって意味ないんだよな・・・

「じゃ、行って来る」

「うん、気をつけてね」

マイケルを見送った僕は、のそのそとテーブルを移動してパソコンに向かった。

「やあ、スマイル」

「やあ、クリフ」

クリフってのは僕がこのパソコンにつけた名前だ。マイケルは僕とは会話出来るのに、何故かクリフとは会話出来ないんだよな。

「おや、今日はマイケルが居ないんだね。大丈夫かい？」

「何とかね。僕はただのカタツムリじゃないからさ」

「ははは、全くだ。我々PCと直接会話出来るのは君だけだもんな」

「うん、そうみたいだね」

「今日も作曲の続きかい？」

「そうだよ」

「熱心だねえ、君は」

僕はアイコンをクリックして作曲用のソフトを立ち上げた。会話は出来るけど、結局彼らは機械。マウスで操作しないと動いてはくれないんだ。何故かって言われても良く分からない。多分、勝手に動かれたら人間達が都合悪いからだろうね。

「うーん、起動が遅いなあ・・・」

「メモリが少ないからね。スマイル、早く増設してくれよ」

「僕はそうしたいんだけど、マイケルがね」

まあ、僕らに余分なお金が無いのは分かってるけどさ、メモリくらい増やしたいよね。マイケルはワープロしか使わないからいいんだろうけど。

「どこまでやったっけ、クリフ」

「確か、ピアノの主旋律を打ち込んだんじゃないか？」

「ああ、そうだね」

僕は再生ボタンをクリックして主旋律を聞き直してみた。

「うーん、ここの所がちょっと・・・」

前はいいと思ったんだけどな。間を置いて聞き直してみると不満も出てくるね。僕は気に入らない部分を消して入れ直した。

「どう思う、クリフ？」

「ごめん、私には音楽の良さは分からないよ。機械だからね」

「そういうものなのかな」

「今鳴った音が何ヘルツだとか、そういった事なら指摘出来るけどね。音楽の良さを評価する関数なんてOSにも組み込まれてないし」

「やっぱり、こういう時はマイケルの方が役に立つなあ・・・」

僕は更に何度か主旋律を打ち直した。

「まあ、とりあえずこの位にして、リズムを入れよう」

ドラムパートに大まかに音を入れる。それから主旋律の音に合わせてながらベースの音を地道に打ち込んだ。

「ふう、ちょっと疲れた・・・」

いくら僕用に小型のマウスを使ってるとはいえ、カタツムリの作業速度なんてたかが知れている。マイケルが居れば10倍以上の速さで打ち込めるのに。

「やっぱり、マイケルが居る時にした方が良かったんじゃないか？」

「うーん、そうかも知れない」

僕は水の入った小皿に近づいて水分を補給した。

「こんな過酷な労働をしてるカタツムリは僕だけだろうなあ・・・」

「でも、作曲は君の趣味で、仕事ではないんだろ？」

「まあね。まだまだ曲の完成度も低いし。でも、いつかは小説みたいに販売出来ればと思ってるよ」

「そうか、頑張ってくれよ、スマイル」

「でもその為にはマイケルがもっと協力的になってくれないとダメだね」

「彼は音楽が好きではないのかな？」

「聞くのは好きみたいだけど、作り手になろうという気はないみたいだね」

さて、一休みしたし、続きを打ち込むとしようか。僕は再びマウスに向かった。

「えーと、次はストリングスを入れてみようかな」

1時間程かけて弦のパートを入れ、取り合えず試し聞きをしてみたけど、どうもしっくりこなかった。

「うーん、音色が悪いのかな・・・」

「苦労してるね、スマイル」

「ちょっとリバーブの設定を変えてみよう」

色々といじってみたけど、なかなか上手くいかない。

「どうしようかな、クリフ」

「私には分からないよ」

「取り合えず、もう1パート増やしてみるかな」

僕は更にブラスの音色を追加した。音が増える事でバランスが取れる場合もあるからね。

「どうだい、スマイル」

「少し、良くなってきたかなあ・・・」

だが突然に破局が訪れた。

「う、まずいぞ」

「どうしたの、クリフ？」

「フリーズだ」

「うわっ！！」

作曲用ソフトは虚しく強制終了してしまった・・・

「ああ・・・全部消えちゃったよ・・・」

「すまない、スマイル・・・」

「いや、ちゃんセーブしなかった僕が悪いんだ。クリフのせいじゃないよ」

「メモリがもっとあればこんな事にはならなかったんだが」

「そうだね・・・」

正午過ぎ、マイケルが帰宅した。

「ただいま、スマイル」

「おかえり、マイケル」

長髪を切ってさっぱりしたマイケルは妙に機嫌が良かった。

「ほら、ピザだぞ」

「あ、うん・・・」

「どうした、元気ないな」

「作曲ソフトがフリーズしてさ、今日の作業が全部無駄になっちゃった」

「だから言ってるだろ、まめにセーブしないとダメだって」

「ねえマイケル、メモリ増設してよ」

「まあ、そのうちにな」

「・・・・・・・・」

僕らはピザを食べ始めた。

「いやあ、床屋に行って良かったよ」

「え、女の子と話が出来たの？」

「それがさ、私の作品を読んでたんだよ、彼女」

「『僕ら』の作品だよ」

「それで話が盛り上がっちゃってさ、今度食事をおごってやることにしたよ」

「へえ・・・」

確か、前にもそんな事があったよな。数回おごらされた挙句に一方的にサヨウナラだったっけ。どうせ今度もそうなんじゃないの？

「そういう訳で、ちょっと出費が増えるかも知れないぞ」

「そんな余裕ないよ、僕らには」

「ガンガン執筆して補うさ。ピザ食ったら始めるぞ」

「はあ・・・」

あーあ、当分は音楽をやる時間も無さそうだな・・・・・・・・